



特 許 願

請

昭和50年10月27日

特許庁長官 齊 藤 英 雄 殿

発明の名称 繊維質面材

発明者 特許出願人と同じ

住 所

氏 名

特許出願人

住 所 東京都杉並区大宮2丁目17番10号

氏 名 遠 山 圭 子

代表者

国 籍

代 理 人

住 所 東京都中央区日本橋3丁目13番11号
油脂工業会館3階(電話 273-6436番)

氏 名 (6781) 弁理士 倉 内 基 弘
(外1名)

方式審査

50 128332

明 細 書

1. 発明の名称 繊維質面材

2. 特許請求の範囲

1 所望の色調に染色した短繊維を増粘剤及び所望により接着剤を含有した水性媒体に分散懸濁したことを特徴とする面材。

3. 発明の詳細な説明

本発明は繊維質の面材に関し、特に繊維質の絵の具に関する。

従来の絵画用の面材としては、インキ、墨、絵の具等が用いられ、また張り絵としては色紙和紙等が用いられている。これらの面材は、それぞれ異つた色調、特性を持ち、異つた美感、趣味感を生じる。またこれらの面材は異つた技法を要求するものである。このように面材の選択は絵面のジャンルをも規定する程の影響を有するものであるから、新たな面材の提供は絵画の分野及び教育

①9 日本国特許庁

公開特許公報

①特開昭 52 - 52716

④3公開日 昭52.(1977) 4.27

②特願昭 50-128332

②2出願日 昭50.(1975) 10.27

審査請求 有 (全3頁)

庁内整理番号

7265 46

⑤2日本分類

118 B31

⑤1 Int. Cl?

C09D 5/06

識別
記号

101

の分野にはかり知れない刺激となりうる。

本発明は繊維質の面材、特に絵の具を提供することを提供することを目的とする。

従来繊維質の絵の具は全く知られていない。繊維材料、特に色紙和紙等の面材は広く知られているが、これらは決して絵の具とは言えない。張り絵の案材は着色した和紙または布地であり、はさみ又は手と糊による切り張りが手法の中心である。また抄紙技術を用いて着色繊維を所望の図案の形で原紙へすき込むとか、文様を重ね合わせる手法が知られている。しかし、かかる方法は普通の人には採用し難い高級な技法を要求するものであるから、一般には普及し難い。しかし抄紙技術により製作された絵画は繊維(特に和紙)の特徴が現われるため、特殊な美感を生じるものである。従つて、より安価で、より使用が容易な繊維質面材により同等な美感を達成できれば当業界に資するところが大きい。これにより、教材として和紙の成り立ちを子供達に教え、我が国の伝統の抄紙芸術を万人の中に残し、また新たな芸術作品を生

み出すための素材とすることができよう。

本発明による新規な繊維質の絵の具は、短繊維を増粘剤及び所望により接着剤及び／又は防腐剤（増粘剤又は接着剤が天然物質の場合）又必要に応じ湿潤剤を含有する水性媒体に分散懸濁して成る。以下具体的に本発明を説明する。

短繊維は人絹、スフ、こうぞ、みつまた、パルプその他任意の繊維材料から選択しうる。繊維の長さは予め1～5mm程度に裁断しておく。長過ぎる繊維は絵の具としての使用を困難にする。何故なら水性媒体に分散させることが難しく、またある程度分散できても絵の具を面板上に施す際に取扱いが難しい。一方短か過ぎる繊維はその方向性から来る趣味感を減じる。従つて繊維の太さ、材質によつても変わりうるが適当な長さ範囲を選択すべきである。

短繊維は染色済のものから裁断するか、または裁断後に染色する。かかる染色は任意の慣用技術を採用して実行できる。或いは繊維材料は市販の染色繊維から選択することも可能である。

5

繊維より成る本発明の絵の具は、繊維質の基材の上に画かれる。例えば面用紙または布地を基材とする。この場合に、水及び増粘剤は基材に吸収され、繊維は残留し、乾燥する。繊維は接着剤がなくても基材に付着していて、そのままでは剥離することがない。特に天然の繊維の場合にはそうである。しかし、連続的な振動とか、繊維への摩擦とかがあると、剥落のおそれがある。一方、接着剤を多量に入れて上記の問題点を回避せんとすると、今度は基材上に画いた繊維から水分が容易に分離することができなくなる。従つて接着剤の使用は数%以内に留める。接着剤としてはフノリ、デンプン、水溶性ノリ（PVA等）、ポンドなどが使用できる。尚天然の繊維については接着剤の使用は必ずしも必要がない。

さらに、増粘剤として天然の材料例えばトロロアオイを用いる場合には防腐剤を使用すべきである。

かくて製造された絵の具は小びんに入れて保存する。多色セットとして所要数の具つた絵の具を

5

特開 昭52- 52716 (2)

次に着色した短繊維を水に分散させる。十分に分散させた後に増粘剤を添加し更に良くかき混ぜる。これにより十分な分散を得る。増粘剤はトロロアオイ、ポリアクリル酸ソーダ、ポリメタアクリル酸ソーダその他の任意の増粘剤が使用できる。増粘剤の目的は短繊維の分散性の改善と安定性の改善である。即ち短繊維は水にどれほど良く分散させても、静置すると浮上または沈降して比較的簡単に分離する。増粘剤の使用は分散をし易くすると共に、浮上や沈降を防止し、長時間の後にも本発明の絵の具の使用を可能にする。増粘剤の量は使用増粘剤の重合度繊維の材料、太さ、長さによつて左右されるので、実施に当つて適宜に選択すべきである。増粘剤の濃度は絵の仕上りにも影響するので、この面からの配慮も必要である。尚増粘剤と水とを予め混合した上で短繊維を混合分散させてもよいことは明らかであろう。

次に上記の分散体には接着剤が含有されてもよい。しかし、これは次の理由から少量に留めるべきである。一般に、水及び増粘剤に分散させた短

4

用意することは勿論である。本発明の絵の具はそのままの状態で使用に供される。

本発明の絵の具の使用方法を以下に説明する。

短繊維を浮遊させた前記の液体をスポイド（繊維の通過し得る大きさの口を有するもの）を使つて吸上げ、それを面用紙等の特に吸水性の基材の上に施す。スポイドを画筆のように操作して絵を自在に画き上げていけばよい。好ましくは、スポイドの出口形状を丸、角、扁平等に変形させ、また種々の寸法のものを用意しておく。かくて画筆のようにタッチ等の変化が可能となり、絵に面白みがでて来る。また他の技法としては単に鉤針、へら或いはさじで絵の具をすくい上げ、それを台紙上へ並べて行くこともできる。他の方法としては綿吹きの使用、高所からの滴下等色々な技法が考えられる。本発明の絵の具は、積重ねによつて立体表現（彫刻）も可能とし、また積重ねた色の間に干渉がないから、色の汚れが生じない。

また台紙は繊維を表面に残し、水を吸い込むために洗い張りの要領で台紙をシワにならないよう

6

に乾かす必要がある。ぬれている間は色がうすいが乾燥して来ると繊維が台紙に密着して美しい色がすき絵のように浮び上つて来ることが分つた。

以上により、本発明を説明したが、本発明の範囲内で多くの変形例が可能であることは、当業者には明らかであろう。

代理人の氏名

倉内 菫 弘



同

倉 橋

咲



特開 昭52- 52716 (3)

添附書類の目録

(1) 明細書	1 通
(2) 図面	1 通
(3) 委任状及びその訳文	各 1 通
(4) 優先権証明書及びその訳文	各 1 通
(5) 出願審査請求書	1 通

前記以外の発明者、特許出願人または代理人

代理人

住 所 東京都中央区日本橋3丁目13番11号
油脂工業会館3階(電話 273-6436番)
氏 名 (7563) 弁理士 倉 橋 咲